

改善、改善、日々改善。

神原 輝人

vol.82

神原 一孝 Kanbara Kazutaka

1965年生まれ不知火町在住。熊本工業高校卒業後、83年、当時の NEC 川尻工場に就職。製品を加工しやすくする補助工具の製作を担った。ルネサスエレクトロニクス移行後、現在は機械工作係として、設計やプログラミング、部品製作までこなす。この功績がたたえられ、平成26年に現代の名工に選出。平成30年には黄綬褒章を受章した。



名工学科中級コースで製作するボールペンとペン置き
右の穴はペンが絶妙に立つよう100分の1³の精度

現場の声を聞く

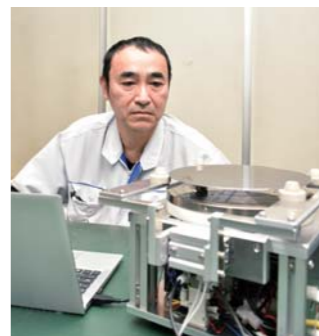
半導体を製造する、熊本市のルネサスセミコンダクタマニユファクチャリング川尻工場。その広い敷地の一角に、神原一孝さんの仕事場がある。

平成30年に52歳で黄綬褒章を受章した神原さんは、技術者としてこれまで5件の特許を取得。

その1つが、厚さ1ミリのほどの円盤の半導体製品を専用ケースに入れる搬送装置だ。以前は、1回で30枚程の高温の製品を人が1枚ずつピンセットで移していた。神原さんは、それを機械自らが3ミリの製品の隙間を通って受け取り、人の手を使わず自動で全てケースに入れる装置を開発。先駆者として、半導体製造を効率化する装置や補助工具を、製造現場の声を聞きながら内製化してきた。その数1000超。これも、現場の声を大事にする神原さんだからこそ。「現場作業者の要望通りではなくて倍ぐらい良くしたい。もっと良いものを安全な形でいつも考えているので、新しい



神原さんを中心に笑いの絶えない職場
(前列右 中嶋さん、中列右 田島さん)



プログラム中の製品吸着ステージ
空気圧で製品がずれないように固定



褒章授与式後、帝国ホテルで
妻の民枝さんと記念撮影

アイデアが生まれるのかなと思いますね。」と神原さんは話す。
始まりは至って平凡

高校卒業後、同社前身のNECに入社したが、就職の決め手は大企業で家に近いから。初めから技術者を志したわけではない。「高校は金属科でしたが、野球がたくて入ったくらい。ただ、入社後は与えられた仕事を一生懸命しました。やったことのなかったプログラミングも、勉強すればするほどいろいろできるようになって。それが自分のモチベーションでしたね。」

神原さんが自他共に認める一番の特技は「しゃべり」。元上司の田島利行さんは「しゃべりがうまくないと現場の人たちから必要なことを聞き出せません。神原さんはコミュニケーション能力も高いですよ。」と太鼓判。神原さんは「私は昔からおちゃらけ。先輩からはよく怒られましたね。これは不知火小の頃からですよ。」と笑う。
神原さんは、自身の活躍はそんな小学校の同級生でもある妻

民枝さんのおかげだと言う。

「妻は、働きのながら家事全般をやってくれます。仕事に集中できる環境を作ってくれて本当に助かっています。」と感謝する。

次世代へ紡ぐ

神原さんの一番弟子中嶋一樹さんは、今や職長として職場をまとめる存在だ。それでも「神原さんが加工しないと精度が出ないことも。ミクロン単位の、神原さんが音で判断される技術をどう受け継げるかが今後の課題です。」と偉大な先輩の背中を見つめる。

今年57歳の神原さん。社内には技術伝承のため、名工学科という教育のカリキュラムができた。「どの部品をどう使うのか、やってみないと加工は分かりません。改善のためにもやっぱり教育は必要。若い人に伝承し、ずっとこの職場が続いていけば。そのための人財育成。続けていきたいですね。」と神原さん。
唯一無二の名工の技術。それは、希望を未来へつなぎ、また新たな財産を紡いでいく。